平成２５年度　京都外国語大学教志会
英語授業実践報告会・研究会実施報告書

日時　平成 25 年８月４日(日)
場所　京都外国語大学　９号館　４階　９４１教室

「基調講演」

東アジアの英語教育から見えてくるもの　―教員養成機関が担うべき役割を考える―

京都外国語大学外国語学部英米語学科
相川真佐夫

概要
アジアの子ども達が交流する時代はすでに来ている。自己紹介し合い、自分の住んでいるところや好きな食べ物について情報を受信・発信するばかりでなく、制服の必要性や平和について自分の意見を交換するところまでコミュニケーションの幅は広い。「英語」はその場を仲介する道具に過ぎないが、子ども達をこの輪の中に溶け込ませるために、私たち英語教員がすべきことは何だろうか。日本の英語教育の定めるべき針路は、我が国だけの論理では語れない時代が来ているのではないだろうか。「英語」が単に「教養」「科目」という位置づけでなく、国境を越えたコミュニケーションの道具であるならば、国際軸で日本の座標を確認する必要があることを提案したい。また、英語教員自らが「英語は国際共通語」として納得してはいけない。このことは“Pax Mundi per Linguas”の理念をもって学んだ教志会メンバーなら理解できるはずである。英語は「仮の共通語」であり、その先には互いの言語を身につけ合い、ひとつでも多くの言語をひとりひとりに宿す発想が必要である。ヨーロッパで始まった複言語主義は、アジアにも応用するべき価値があるであろう。
日本の英語教育の特徴を国際比較により分析すると、いろいろな点が浮き彫りにされてくる。本講演では、１．日本は小学校段階での英語教育の導入に非常に慎重であり続け、常に折衷案のような路線を歩んでいること、２．教科書に掲載されている言語材料の分量が少なく、教師が補う責任があるということ、３．評価の方法が知識を問うものに偏り、「実際に使用できるかどうか」という運用まで含められていないこと（「能力指標」によるチェックシステムがないこと）、４．教員の英語力のチェックシステムが足りていないこと、の４点を紹介した。国際比較により差異が明らかになるものの、その差を短絡的に「是」か「非」に評価することは避けるべきである。ただし、日本と同じように英語を外国語として学んでいる国々（EFL 環境）の英語教員の質の変化を肌で感じたとき、日本の英語教育の現状に危機感を覚えないではいられない。
そこで、同じ日本と同じ EFL 環境において、「英語を教える」とはどういうことか、との点に注目し、英語教員免許取得希望者に対し、台湾への研修を試みている。研修内容は、台湾の教員養成機関の「英語教育法」の合同受講と授業内でのプレゼンテーションやディスカッションの実施、小中学校の授業参観と模擬授業（プレゼン）等である。この体験の目的は、他国における同世代の教員志望者の英語力の程度を知り、英語非母語話者の教員が小中学校でどのように英語を教えているのか、また、現地の生徒の英語力や英語学習に対する態度はいかなるものか、母語を使用せずに英語で教えることが可能なのか、実際の目で確認させることである。研修を通して、参加学生からは同じ英語教員を目指すものとしてレベルの違いに驚かされ、授業の大半を英語で行うことは不可能ではない現実を目の前にし、大きな刺激を受けている。また、共通語として用いる英語の便利さを再認識すると同時に、英語だけでは物足りないことにも、気づくようになる。
我々英語を教える者は、足下に注意を払いながらも、子ども達の向かうべき将来に盲目になるべきではない。日本の子ども達の将来を考えるにあたり、まずは教員自身の意識を変えることに臆病にならないことが必要である。

シンポジューム「今どきの中学生を語る」

コーディネーター

大津市立真野中学校教　教諭 小谷 博樹　先生

シンポジスト

大阪市立東三国中学校　校長　名田 正廣　先生
「大阪市の中学校教育の現状について」

和歌山県田辺市明洋中学校　校長　佐武 正章　先生
「第 19 回ジョンケンドリック杯小中学生スピーチコンテスト」
～2012 年 12 月 9 日、子どもたちの英語力が、生き生きと溢れる！～

校友会　常任幹事　髙居　佐紀　先生
「今どきの中学生を語る。」

京都府立鳥羽高等学校定時制　再任用教諭 田中 道博　先生
「とばてい生が詠む　夜に学ぶ高校生のこころ」
～「とばてい川柳」について～






平成 25 年度　京都外国語大学英語授業実践報告会・研究会

シンポジューム「今どきの中学生を考える」

京都府立鳥羽高等学校定時制再任用教諭
田中　道博（s48 年卒）

とばてい生が詠む　夜に学ぶ高校生のこころ。～「とばてい川柳」について～

審査基準

①定時制の生活から生まれた歌であるか。
②定時制らしさが出ているか。
③定時制に入学して決意したことがあるか。
④成長のあとがうかがえるか。
⑤定時制に通う生徒が共感できる内容であるか。

とば定大賞

実体験をリズムよく詠み、共感できる作品。
「我が青春　山あり谷あり　追試あり。」
四年　二代目ソロモンの悪夢

優秀賞

四年間の成長のあとが見て取れます。
「金パツが　四年もたてば　黒髪に。」
四年　たらこバター

普段の学校生活の一コマが、将来きっといい思い出になるで
あろう事を予感させます。
「何気ない今はいつかは宝物。」
三年　パンダ

鳥羽定に入学できた喜びがよく伝わります。
「あこがれた　こうこうせいを　かみしめる。」
二年　くさび文字

定時制のクラスの状況をうまく表現しています。
「同級生　年の差　なんど半世紀。」
二年　なごみ

夕焼けを見ながらの登校風景が目に浮かびます。
「登校時　空がきれいな　茜色。」
一年　北村　和哉

かかわりを学ぶ　「社会」へ送り出す側の実践考

平成２５年度　京都外国語大学英語授業実践報告会・研究会

シンポジューム「今どきの中学生を考える」

校友会　常任幹事
髙居佐紀

１．子供同士のけんかの学校（先生）とのかかわりかた
２．クラス編成の仕方
３．小学校教諭による英語の授業を参観して



